

盛安寺「明智の陣太鼓」について

東山 政司

瑞王山盛安寺。比叡山麓の坂本の南端で、穴太に隣接する地域にある天台真盛宗の古刹です。

ここは近世、「明智寺」と呼ばれていました。

明智光秀の供養塔や位牌が祀られており、また「明智の陣太鼓」と呼ばれる太鼓が伝わっています。昨年、大津市歴史博物館で展示されましたので、ご覧になった方を多いと思います。

享保十九年（一七三四）に成立した地誌『近江輿地志略』には、「当寺に太鼓あり。是明智光秀の時尅（刻）をうちし太鼓なりといふ。」と記されており、江戸中期には知られていたようです。また江戸時代後期の文化十一年（一八一四）の観光ガイド『近江名所図会』には「明智光秀陣太鼓世にこれは八尅（刻）太鼓と云う。堂宇にあり。按ずるに光秀にあらず、左馬介の伝来にや」という説明が絵入りで記載されています。



『近江名所図会』

国文学研究資料館データベースより

このような名前が付けられていると、どこか訝しい印象を受けますが、実は伝来を伝える史料が残されています。

天正十一年（一五八三）八月八日付の盛安寺御同宿中宛矢嶋久兵衛尉貞治書状です。

貼紙に「寺領太鼓田御寄進折紙之写」とあり、近世の写しです。

当寺太鼓田之事、淨戒口式段志賀下城口ニ大石川左兵衛殿御寄進候知行折紙被申入候御寺納之儀肝要候

矢嶋久兵衛尉貞治 判

天正十一年八月八日

盛安寺御同宿中

内容は、当寺の太鼓田の事、淨戒口の二段・志賀下・城口について、石川左兵衛が寄進を折紙で申し入れているので、寺領として納めるように、と伝えたものです。

この日付について考えてみます。

坂本は本能寺の変後、丹羽長秀の領地となりますが、その後天正十一年（一五八三）八月一日に羽柴秀吉が、家臣杉原家次に坂本付近の代官を命じています。（※1）

つまり、この書状が出されたのは、坂本が杉原家次の支配地となった時期直後、ということになります。本来であれば、坂本一帯は杉原の支配下となるが、太鼓田については石川左兵衛が寄進を申し出ているので、寺領として納めておくように、と矢嶋久兵衛尉が伝えたということです。領主が変わったことを受け、盛安寺から寺領安堵の依頼があり、それに応えたものかもしれません。

淨戒口・志賀下・城口はいずれも地名で、特に淨戒口・城口は坂本城付近にありました。

淨戒口は城堺口に通じていると言われています。これらを「太鼓田」として寄進する、ということですが、「太鼓田」ということばは何を意味するのでしょうか。地名としては「太鼓田」は各地にあるようですが、ここでは地名とは考えられず、「太鼓」＋「田」だとすると、太鼓のための田、太鼓に関わる何らかの理由で田を寄進するという意味と考えられます。『近江名所図会』にある刻を知らせるという役割だけでなく、例えば見張り等の役割があり、その役料として寄進したと考えることができます。盛安寺はやや高台、坂本城を見下ろす位置にあるということも付け加えておきます。

この書状より、盛安寺は以前から太鼓を所有し、その役料も受けており、それは明智光秀が城主の時代からの可能性もあります。

「明智の陣太鼓」という呼び名もあながち間違いではないのかもしれませんが。

最後に、関係した人物について触れておきます。

石川左兵衛は、諱を光政といい、秀吉の古参の家臣です。秀吉が長浜城主時代だった頃の竹生島宝厳寺への寄進記録である『竹生島奉加帳』にも名を連ねています。賤ヶ岳の合戦で奮戦して戦死した石川兵助の兄と言われています。

差出人の矢嶋久兵衛尉貞治については、「[大津歴博だより](#)」では、よくわからない、としつつも、江戸時代に坂本で山門領諸事仕置方役人として矢嶋大膳が見られ、町惣代として矢嶋姓があるので、町人として坂本を取りまとめていた人物の一人の可能性を指摘しています。(和田光生…二〇二〇)

確かに坂本には矢嶋氏がいたようで、軍記ものですが、「[応仁記](#)」(※2)に「矢嶋。那須ナド坂本衆召具。」とあり、[応仁の乱](#)の頃から坂本に矢嶋氏がいたことが知られてきました。

ただこの矢嶋久兵衛尉については、坂本との関わりだけではなく、秀吉家臣としての活動が多々見られます。

天正十五年(一五八七)九月、丹波氷上郡久下金屋村で検地を行う。(※3)

天正十九年(一五九一)三月十一日、近江坂田郡小野莊等の検地をおこなう。(※4)

天正二十年(一五九二)二月十九日、羽柴秀吉より撰津伊丹近辺での洪水による道橋の損害について、代官として見回り、対処するように命じられる。(※5)

文禄二年(一五九三)八月二十七日、堀尾吉晴・羽柴秀勝らと共に丹波柏原八幡神社に燈明田を寄進。(※6)

文禄三年(一五九四)、河内大枝村にて検地を行う。(※7)

文禄四年(一五九五)八月、速水守之と共に大和国吉野郡の検地を行う。(※8)

これらから矢嶋(矢島・八嶋)久兵衛尉貞治は秀吉政権下で、畿内各地で検地等を行う奉行職として活躍したことがわかります。管見の限り、天正十五年(一五八七)より前に矢嶋久兵衛尉の活躍を見られませんので、坂本が秀吉の勢力下に置かれてから見出され、奉行として活躍したものと考えられます。

なお、諱の貞治については、他の史料には見えず、本書状にのみ見えるものです。

また、矢嶋久兵衛尉に似た名前の人物として、矢島久右衛門増行がいます。

浅野長政の家臣として、天正十七年(一五八九)から史料に散見されます。(※9)

曾根勇二氏は久右衛門と久兵衛尉が同一人物の可能性を指摘していますが(曾根勇二…二〇〇四)、既に見てきたように、秀吉家臣としての活動と、浅野氏家臣としての活動が異なるため、別人と考えた方がいいと思います。

久右衛門は浅野長政が坂本城主だった時期に仕えました。「久」の字が共通であり、久兵衛尉の一族の可能性があります。ただ、この久右衛門は「江州八島(矢島)」の出身と史料にあり(※10)、坂本の矢嶋氏の出ではないようです。もし久兵衛尉と同じ一族だとすると、久兵衛尉も矢嶋(栗太郡)の出身かもしれません。

盛安寺は、江戸時代初期に建造された本堂が天津市指定有形文化財、伏見城の遺構で建てられたとされる客殿が国指定重要文化財となっています。また庭園は滋賀県指定名勝で、江戸時代初期の作庭とされる枯山水庭園で、聖衆来迎図を表現したものとされています。さらに寺の周囲には、穴太積みによる石垣がめぐらされています。

そのような盛安寺に伝わる「明智の陣太鼓」。

現存する陣太鼓が、当時からのものかどうかはわかりませんが、少なくとも織豊期から盛安寺と太鼓は関係があったと思われます。

- ※1 「杉原七郎左衛門尉宛台所入目録」『豊臣秀吉文書集』七七〇号文書
- ※2 「応仁記 二」の「今出川殿勢州下向之事」に記載がある。『群書類従 二十』P239)
- ※3 「丹波国氷上郡久下金屋村検地帳写」 図録『ひょうごと秀吉』四六号
- ※4 「長束正家書状写」吉田三左衛門家文書、『新修彦根市史 第5巻 史料編 古代・中世』八二三号文書
- ※5 「豊臣秀吉朱印状」、『小早川家文書』三三八号文書
- ※6 「燈明田等寄進申状案」柏原八幡神社文書二二号、『兵庫県史 史料編 中世Ⅲ』
- ※7 河内国茨田郡大枝村中村家文書（守口市 市指定文化財ホームページ）

[http://www.city.moriguchi.osaka.jp/kakukanonamai/shiminseikatsubushogaiagakushuka/rekishibunkazai/shishitei\\_bunkazai/1579581849008.html](http://www.city.moriguchi.osaka.jp/kakukanonamai/shiminseikatsubushogaiagakushuka/rekishibunkazai/shishitei_bunkazai/1579581849008.html)

- ※8 「口役開産金沿革抜粹書」『川上村史 史料編』上巻 P220' 「白山神社根元由緒記」『同』P230
- ※9 「鹿苑日録」天正十七年（一五八九）十月一日条、「蓮成院記録」天正十八年（一五九〇）正月十七日条、天正十八年（一五九〇）二月二十一日付「原田左馬助宛八島増行書状」、「兼見卿記」天正十八年（一五九〇）十一月二十二日条、『同』天正十九年（一五九一）十二月十二日条等。

※10 広島市立中央図書館蔵『浅野家諸士伝』『浅野記諸士畧伝』の八嶋久右衛門の項に「八嶋久右衛門ハ初名左太郎と云江州八嶋の人云」とある。

#### 【参考文献】

和田光生「盛安寺蔵「明智光秀陣太鼓」について」『大津歴博だより』一一七号（大津市歴史博物館、二〇二〇年）

曾根勇二「近世国家の形成と戦争体制」、二〇〇四